

NICU看護師の倫理的問題に関する文献検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院看護学研究科 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): NICU看護師, 倫理的問題, 文献検討 キーワード (En): NICU nurse, Ethical issues, Literature review 作成者: 古川, 糸世, 玉上, 麻美 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学, 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20220322-002

NICU 看護師の倫理的問題に関する文献検討

Literature Review on Ethical Issues of NICU Nurses

古川 糸世¹⁾ 玉上 麻美²⁾
Itoyo Furukawa Mami Tamaue

Abstract

【Objectives】 The findings of the literature on ethical issues of NICU nurses in Japan will be summarized and the previous studies will be reviewed.

【Method】 We searched the literature using the Web version (Ver.5) of the Japan Medical Abstract Society (JAMAS), and searched for “NICU”, “newborn”, “nurse”, “ethics”, and “ethical issues” as keywords. And we analyzed the literature of 9 papers.

【Results】 The 9 references were categorized into “Actual Conditions and Factors of NICU Nurses’ Participation in Ethical Decision Making”, “Dilemmas of NICU Nurses”, “Recognition of Ethical Issues by NICU Nurses”, and “Responses to Ethical Issues by NICU Nurses”.

【Conclusion】 It was suggested that NICU nurses’ repeated experience of participation in ethical decision-making would lead to improved judgment and response to ethical issues. In addition, it was important to understand the ethical issues that may arise in the NICU and the perceptions of NICU nurses of the dilemmas and ethical issues they face in order to respond to the actual situation. In the future, we believe that our task is to practice and verify the responses that we have identified.

Key Words : NICU nurse, Ethical issues, Literature review

要 旨

【目的】 国内におけるNICU看護師の倫理的問題に関する文献の知見を整理し、これまでの研究を概観する。

【方法】 医学中央雑誌Web版(Ver.5)を用いて、「NICU」、「新生児」、「看護師」、「倫理」、「倫理的問題」をキーワードとして検索し、9件の文献を分析対象とした。

【結果】 9件の文献は、「NICU看護師の倫理的意思決定への参加実態と要因」、「NICU看護師のジレンマ」、「NICU看護師の倫理的問題の認識」、「NICU看護師の倫理的問題への対応」に分類された。

【結論】 NICU看護師が倫理的意思決定の参加経験を重ねていくことは、倫理的問題の判断や対応力向上につながることを示唆された。また、NICUで生じ得る倫理的問題、NICU看護師が抱えるジレンマや倫理的問題の認識を把握することは、実情に応じた対応に向けて重要であった。今後は、明らかになった対応を実践し、検証していくことが課題と考える。

キーワード : NICU 看護師、倫理的問題、文献検討

¹⁾ 大阪市立大学大学院看護学研究科前期博士課程

²⁾ 大阪市立大学大学院看護学研究科

* 連絡先 : 古川 糸世 〒545-0051 大阪市阿倍野区旭町1丁目5-17
大阪市立大学大学院看護学研究科 臨床看護学分野 母性看護学領域

I. 緒言

NICU（新生児集中治療室）における重症新生児に対する医療技術は急速に進歩し、超早産児や重症仮死児の救命が可能となった。一方で、重篤な障害や後遺症をもつ新生児も増加している。一方、児に対する医療的介入が“過剰な治療”“行きすぎた延命治療”と批判されることとなり（加部, 2017）、倫理的問題を生み出す要因ともなった。

全ての医療行為には倫理的思考や判断を要する側面があり、それに伴い倫理的問題が生じ得る。Sara T. Fryら（2010）は、倫理的課題（ethical issue）とは、倫理的思考や倫理的意思決定を必要とする状況、あるいは道徳的価値の対立としている。特に、新生児医療の現場では、治療対象が意思表示できない新生児であり、どの程度治療する・しないことが最善の利益となるのかという問題（横尾, 1996）が生じる。さらに、

「児の最善の利益」を考える際に、自らの人生観や価値観が影響し、その解釈をめぐる深刻な意見の相違、価値観の対立が生じ、医療従事者にジレンマとストレスをもたらすこととなる（加部, 2017）。このように、複雑な倫理的問題を有する新生児医療において、患者の権利の擁護者であり、尊厳を守る存在である看護師（宮坂ら, 2014）の役割は重要である。横尾（1996）は、新生児医療における看護師は、両親・家族と医師のニーズの間で苦慮することが少なくないとしている。出生時より深く関わり、新生児や家族を最も近くで支えるNICU看護師は、倫理的問題の判断や対応に苦慮していることが予測され、その対応力向上は極めて重要な課題である。

本研究では、NICU看護師の倫理的問題に関するこれまでの研究を概観するため、国内における文献の知見を整理したので報告する。

表1 分析対象文献（9件）

主な著者名	タイトル	研究目的	収載誌名
1. 船戸正久, 他	新生児の倫理問題と意思決定後の対応－NICU看護責任者に対する全国アンケート調査－	新生児の倫理問題に直面した場合の、家族を支えるケアプログラムの充実	日本周産期・新生児医学会雑誌, 40 (4), 817-822, 2004.
2. 井上みゆき	NICUの倫理的意思決定に効果的な看護師－医師コラボレーションの要因－Magnet Hospitalに勤務するARNPの語りから－	NICUの倫理的意思決定過程における効果的な看護師－医師コラボレーションの要因を明らかにする	日本小児看護学会誌, 24 (1), 61-67, 2015.
3. 井上みゆき, 他	NICUにおける子どもの最善の利益と生命維持治療に対する看護師の認識	生命維持治療における子どもにとっての最善の利益について看護師がどのように捉えているかを探索する	日本新生児看護学会, 15 (2), 11-17, 2009.
4. 北尾麻梨, 他	NICUにおける医学上の倫理的意思決定の実態と看護師の参加に関する要因－看護師の役割の一考察－	医学上の倫理的意思決定の実態と、看護師の参加実態と参加に関連する要因を明らかにする	日本小児看護学会誌, 27, 83-90, 2018.
5. 水澤直子, 他	NICU看護師が語るジレンマ	NICUの看護師がどのようなジレンマと対峙しながらケアにあたっているのかを明らかにする	小児看護, 36, 152-154, 2005.
6. 中山宏美, 他	当施設の新生児医療をめぐる話し合いの現状と課題～18トリソミー児一事例のカンファレンスを振り返って～	18トリソミー児一事例の誕生から死までの経過中に行われた話し合いを振り返り、今後の課題を検討する	広島県立病院医誌, 40 (1), 171-175, 2008.
7. 佐久間純子, 他	気管内挿管管理児の抑制に対するNICU看護師の思い	気管内挿管中の患児への抑制に対する看護師の思いを明らかにする	日本看護学会論文集 急性期看護, 46, 192-195, 2016.
8. 山口美穂子, 他	経口気管挿管下で退院し自宅で看取りを行った重症低酸素性虚血脳症の1例	本邦において経口気管挿管下で退院した新生児・乳児例の報告はなく、また今回の症例経験において、看取りに至る過程で様々な葛藤や課題にも直面したため、それらを共有すべく報告する	日本周産期・新生児医学会雑誌, 56 (3), 468-473, 2020.
9. 横尾京子	新生児の治療をめぐる意思決定に関する倫理的問題と看護師の価値観	新生児の治療をめぐる意思決定に関して、看護師が倫理的問題を具体的にどのような状況下で、どのように感じたかを知る	臨床看護研究の進歩, 8, 91-97, 1996.

II. 研究方法

1. 文献検索方法

分析の対象は、検索年次の制限は行わず、日本国内で発表された研究論文とした。文献検索は医学中央雑誌Web版 (Ver.5) を使用し、「NICU」、「新生児」、「看護師」、「倫理」、「倫理的問題」をキーワードとして検索した。「NICU」and「看護師」and「倫理」の検索式 (2021年10月16日実施) では32件、「新生児」and「倫理的問題」の検索式 (2021年10月16日実施) では48件であった。検出文献のうち、会議録 (20件) と解説・特集 (29件)、重複文献 (1件) を除外し、NICU看護師の倫理的問題に関連する9件 (表1) を分析対象とした。

2. 分析方法

分析対象とした文献の結果を類似性により分類し、それぞれの内容に応じて分類名を付けた。

III. 結果

9件の文献を類似性により4つに分類し、分類名を、「NICU看護師の倫理的意思決定への参加実態と要因」、「NICU看護師のジレンマ」、「NICU看護師の倫理的問題の認識」、「NICU看護師の倫理的問題への対応」とした (表2)。「NICU看護師の倫理的問題への対応」3件のうち、2件は「NICU看護師の倫理的問題の認識」にも重複していた。以下、分類した各項目別に説明する。

1. NICU看護師の倫理的意思決定の参加実態と要因

NICU看護師の倫理的意思決定の参加実態と要因に関する文献は3件であった。

船戸ら (2004) は、看護責任者157名を対象とした量的研究により、85%の施設で選択的治療停止の経験があったが、看護師が積極的に意思決定に参加するのは約半数のみであったと明らかにしていた。また、北尾ら (2018) は、NICU責任者5名と看護師218名を対象とした量的研究により、医学上の倫理的意思決定に参加した経験のある看護師は26.1%であり、既存のガイドラインに関する知識のうち、「東京女子医大のクラス分けを知っている」、「淀川キリスト教病院のガイドラインを知っている」の2項目が医学上の倫理的意思決定への参加に関連する要因であったことを明らかにしていた。

井上 (2015) は、ARNP (Advanced Registered

Nurse Practitioner) 2名とその管理者2名を対象とした質的研究により、NICUの倫理的意思決定過程における効果的な看護師-医師コラボレーションの要因を明らかにしていた。【日常の合同ラウンド】での【オープンな話し合い】が基盤となり、これらを実践していくために【コミュニケーション能力】と【専門的知識の向上】が必要な要因であったとし、また、このような効果的なコラボレーションを実践する環境を維持するためには【組織の支援】が要因となっていたと報告していた。

2. NICU看護師のジレンマ

NICU看護師のジレンマに関する文献は2件であった。

水澤ら (2005) は、看護師14名を対象とした質的研究により、看護師が語ったジレンマは、1) 長期入院する子どものケアに関するジレンマ、2) 子どもの後遺症に関するジレンマ、3) 治療の是非に関するジレンマ、4) 施設の限界に伴うジレンマの4つに分類され、その解決に向けて、治療の是非をめぐる倫理的問題の検討や、看護師の倫理観を磨く、話し合いを持つことの必要性を明らかにしていた。また、佐久間ら (2016) は、看護師12名を対象とした質的研究により、気管内挿管中の患児への抑制に対し、看護師はできるだけ抑制をしたくない思いと、安全のためには抑制が必要であるというジレンマを抱えていたことを明らかにしていた。

3. NICU看護師の倫理的問題の認識

NICU看護師の倫理的問題の認識に関する文献は3件であった。

井上ら (2009) は、看護師20名を対象とした質的研究により、看護師にとって、生命維持治療における子どもの最善の利益は、その子どもをみている人に〈子どもが幸せそうに生きていると映る〉ことであり、決定されたことが最善であったか否かは、親がよかったと〈納得しながら生きられる〉ことであると明らかにしていた。また、この結果を踏まえ、死亡率や重篤な障害が非常に高い場合、親の意向を尊重し、緩和ケアを選択肢に入れることが重要であるとも報告していた。

山口ら (2020) は、経口気管挿管下で退院した症例報告を行っており、看護師がこれまでに経験してきた重症児への支援目標と異なっていたため、看取りに至る過程で戸惑いや葛藤に直面したこと、一方で、家族

表2 NICU看護師の倫理的問題に関する文献

分類	著者	デザイン	研究対象	結論
倫理的 意思決定の 参加実態と 要因	1. 船戸ら (2004)	量的研究	看護責任者 (n=157)	選択的治療停止は、85%の施設で経験があったが、看護師が積極的に意思決定に参加するのは約半数のみであった。今後、「命をいつくしむ医療」という core (倫理、愛情) を基に、cure と care の豊かなプログラムの開発、教育やハードの整備が重要になる。
	2. 井上 (2015)	質的研究	Advanced Registered Nurse Practitioner (n=2) Advanced Registered Nurse Practitioner 管理 者 (n=2)	【日常の合同ラウンド】での【オープンな話し合い】が基盤となり、これらを実践していくために【コミュニケーション能力】と【専門的知識の向上】が必要な要因であった。このような効果的なコラボレーションを実践する環境を維持するためには【組織の支援】が要因となっていた。
	4. 北尾ら (2018)	量的研究	NICU 責任者 (n=5) 看護師 (n=218)	医学上の倫理的な意思決定に参加した経験のある看護師は26.1%であり、既存のガイドラインに関する知識のうち、「東京女子医大のクラス分けを知っている」、「淀川キリスト教病院のガイドラインを知っている」の2項目が医学上の倫理的な意思決定への参加に関連する要因であった。
ジレンマ	5. 水澤ら (2005)	質的研究	看護師 (n=14)	看護師が語ったジレンマは、1) 長期入院する子どものケアに関するジレンマ、2) 子どもの後遺症に関するジレンマ、3) 治療の是非に関するジレンマ、4) 施設の限界に伴うジレンマの4つに分類された。
	7. 佐久間ら (2016)	質的研究	看護師 (n=12)	気管内挿管中の児に対し、できるだけ抑制をしたくない思いと、安全のためには抑制が必要であるというジレンマを抱えていた。
倫理的 問題の 認識	3. 井上ら (2009)	質的研究	看護師 (n=20)	看護師にとっての子どもの最善の利益は、その子どもをみている人に〈子どもが幸せそうに生きていると映る〉ことであった。決定されたことが最善であったか否かは、親がよかったと〈納得しながら生きられる〉こととした。
	8. 山口ら (2020)	症例研究		退院後にNICU医師-看護師でカンファレンスを行い、看護師から戸惑いや葛藤があったことが表出された。特に、これまで経験してきた重症児の場合は、自宅退院を目指し、家族を支援していくことを目標としていたが、本症例に関しては目標が大きく異なっていたため、戸惑いが大きかったようであった。一方で、同行したスタッフから家族と自宅で過ごした穏やかな看取りの報告を受けて、最終的に良い選択だったのだと納得できたという意見が聞かれた。さらには、今後同じような重症児に対して看取りを優先していくことになるのかという疑問も表出された。
	9. 横尾 (1996)	質的研究	看護婦 (n=28)	看護婦が感じた児や親・家族にとっての倫理的問題は、「新生児にかかわる人たちの間で考え方や価値観が異なる場合に、誰の価値を優先すべきか」ということに関する問題」と、「治療自体がもつ非倫理性に関する問題」という2つのテーマに大別できた。
倫理的 問題への 対応	6. 中山ら (2008)	症例研究		1) 継続受け持ち看護師がいなくてもタイムリーに話し合いができる方法の検討。2) カンファレンスの目的を明確にし、方法について検討。3) 倫理的問題を含む事例の話し合い方法について検討し、定期的に倫理問題に関する話し合いの機会をつくる。
	8. 山口ら (2020)	症例研究		最重症児に対する医療行為が必ずしも児の最善の利益とはなっていない可能性を常に意識していくべきであり、これまで経験したことのない倫理的問題に対しては画一的な対応に終始せず、各症例に合わせた様々なプロセスを慎重に進めていくことが重要である。
	9. 横尾 (1996)	質的研究	看護婦 (n=28)	医師とは異なる役割をもつ看護婦は、積極的に意思決定の場に参加していかなければならないと考えるが、それには、患者や家族との関係についてのフィロソフィや看護の倫理的基礎を明確にするとともに、自分自身の価値観を内省し自覚して対処する必要がある。

と自宅で過ごした穏やかな看取りであったことから、最終的に良い選択だったと納得できたという意見、今後同じような重症児に対して看取りを優先していくことになるのかという疑問が聞かれたことを報告していた。

横尾 (1996) は、看護婦28名を対象とした質的研究により、看護婦が感じた児や親・家族にとっての倫理的問題は、「新生児にかかわる人たちの間で考え方や価値観が異なる場合に、誰の価値を優先すべきかということに関する問題」と、「治療自体がもつ非倫理性に関する問題」という2つのテーマに大別できたことを明らかにしていた。

4. NICU看護師の倫理的問題への対応

NICU看護師の倫理的問題への対応に関する文献は3件であった。

中山ら (2008) は、18トリソミー児の一事例の症例研究により、児の誕生から死までの経過中に行われた話し合いを振り返り、1) 継続受け持ち看護師がいなくてもタイムリーに話し合いができる方法の検討、2) カンファレンスの目的を明確にし、カンファレンスの方法について検討、3) 倫理的問題を含む事例の話し合い方法について検討し、定期的に倫理問題に関する話し合いの機会をつくる、の3点を今後の課題として報告していた。

山口ら (2020) は、経口気管挿管下で退院した症例報告の中で、最重症児に対する医療行為が必ずしも児の最善の利益とはなっていない可能性を常に意識し、これまで経験したことのない倫理的問題に対しては画一的な対応に終始せず、各症例に合わせた様々なプロセスを慎重に進めていくことが重要であると報告していた。

横尾 (1996) は、看護婦28名を対象とした質的研究により、医師とは異なる役割をもつ看護婦が、積極的に意思決定の場に参加していくためには、患者や家族との関係についてのフィロソフィや看護の倫理的基礎を明確にするとともに、自分自身の価値観を内省し自覚して対処する必要があることを明らかにしていた。

IV. 考察

9件の文献を分析した結果、質的研究が5件、量的研究が2件、症例研究が2件で、質的研究によるものが多かった。

本研究では、国内におけるNICU看護師の倫理的問題に関する文献の知見を整理し、「NICU看護師の倫理的意思決定の参加実態と要因」、「NICU看護師のジレンマ」、「NICU看護師の倫理的問題の認識」、「NICU看護師の倫理的問題への対応」の4つに分類できた。

1. NICU看護師の倫理的意思決定の参加実態と要因

新生児の治療における意思決定において、新生児には意思能力がないことから、親権者である親が子どもの医療について決定する権利を持つことになる(櫻井, 2011)。一方で、親の心理状態や医学情報の理解、また、生命の危機が切迫し即断が要求される局面を考え合わせると、親から治療の同意を得るという手続きに親の意思を的確に反映させることは難しい(横尾, 1997)。さらに、親がどのような形で意思決定に加わろうとも、決定結果は一生親についてまわるため、ケア提供者は、親が倫理的意思決定に加わることに伴ってどのような認識を持っているか知っておくことが重要である(横尾, 1997)。

論文の知見として、船戸ら (2004) は、85%の施設で選択的治療停止の経験があったが、看護師が意思決定に参加するのは約半数のみであったこと、また、北尾ら (2018) は、意思決定に参加した経験のある看護師は26.1%であったと示した。ケア提供者であるNICU看護師にとって、倫理的意思決定に参加し、子どもに代わって意思決定を担う親の意思や希望、苦しみを理解しサポートすることは重要な役割であり、また、倫理的意思決定の参加経験を重ねていくことが、その判断や対応力向上につながると思われる。

井上 (2015) は、新生児の治療をめぐる「子どもの最善の利益」に基づく決定をするためには、真の看護師-医師コラボレーションを実践しなければならないが、看護実践の場ではその改善がされていないとし、NICUの倫理的意思決定過程における効果的な看護師-医師コラボレーションの要因を示した。NICUの倫理的意思決定過程において、看護師と医師が「子どもの最善の利益」のために、それぞれの専門的観点から検討することは重要であり、その検討の場を設定・調整することは、NICU看護師の倫理的問題の対応力に位置づけられると思われる。

2. NICU看護師のジレンマ

臨床現場では、患者やその家族、医療従事者間などにおいて様々なジレンマが生じる可能性がある。なかでも意思表示できない新生児が治療対象であるNICU

において、児や家族を最も近くで支える看護師は、ジレンマを抱えやすい状況といえる。

水澤ら（2005）は、問題を抱えながら様々な限界の中で可能な限りの医療やケアを行っているNICUでの共通した現実の中で、看護師は多くのジレンマを持ちながら日々のケアを懸命に行っていると、NICU看護師の対峙するジレンマを4つに分類して示した。また、佐久間ら（2016）は、気管内挿管管理中の児に対し、児の人権を尊重すればできるだけ抑制したくない思いと、安全のためには抑制が必要であるというNICU看護師が抱えるジレンマについて示した。このように、臨床現場でNICU看護師が実際に抱えているジレンマを把握することは、新生児医療における複雑な倫理的問題に対応していくために重要な過程であると考えられる。今回の文献は、いずれも質的研究であり、研究対象者数は少ない。今後さらなる量的研究に取り組み、NICU看護師のジレンマの実態把握が必要であると考えられる。

3. NICU看護師の倫理的問題の認識

山口ら（2020）は、一症例の経験を通し、倫理的問題に対する看護師の戸惑いや葛藤、一方で納得の気持ちなどを報告しており、倫理的問題の認識に個人差があることが示唆された。これは、個人の考え方や価値観の違いによるものと考えられる。しかし、井上ら（2009）は、看護師にとって、生命維持治療における子どもの最善の利益とは何かという問題に対し、その子どもをみている人に〈子どもが幸せそうに生きていると映る〉ことであったと報告しており、倫理的問題の認識に、一定の傾向があることも推察された。また、横尾（1996）は、看護婦が感じた倫理的問題について、「新生児にかかわるすべての人たちの間で考え方や価値観が異なる場合に、誰の価値を優先すべきか」ということに関する問題」と、「治療自体がもつ非倫理性に関する問題」という2つのテーマに大別できたことを示した。そのため、NICUという特殊な環境で生じ得る倫理的問題と、そこでケア提供する看護師の倫理的問題の認識の実態を把握することは、実情に応じた対応を見出すために重要であると考えられる。

4. NICU看護師の倫理的問題への対応

NICU看護師の倫理的問題への対応について、中山ら（2008）は、一症例の誕生から死までの経過中に行われた話し合いを振り返り、倫理的問題を含む事例の話し合い方法を検討し、定期的に話し合いの機会をつ

くることを課題として報告していた。倫理的問題への対応として、話し合いが重要であると考えられる。

山口ら（2020）は、最重症児に対する医療行為が必ずしも児の最善の利益とはなっていない可能性を常に意識し、これまで経験したことのない倫理的問題に対しては、各症例に合わせた様々なプロセスを慎重に進めていくことが重要であると報告していた。また、横尾（1996）は、看護婦は積極的に意思決定の場に参加していかなければならないと考えるが、それには、自分自身の価値観を内省し自覚して対処する必要があると示していた。倫理的問題に対応していくにあたり、その背景には様々な考え方や価値観が存在する。それ故に、問題への対応が難航する可能性もある。しかし、自身も含め、様々な考え方や価値観を俯瞰し、対象の児にとっての最善の利益を常に意識し、対応することが重要と考える。

V. 結論

本研究では、NICU看護師の倫理的問題に関する文献を分析し、以下の結論を得た。

1. NICU看護師の倫理的問題に関する9件の文献は、「NICU看護師の倫理的意思決定への参加実態と要因」、「NICU看護師のジレンマ」、「NICU看護師の倫理的問題の認識」、「NICU看護師の倫理的問題への対応」の4つに分類された。
2. NICU看護師にとって、倫理的意思決定に参加し、子どもに代わって意思決定を担う親の意思や希望、苦しみを理解しサポートすることは重要な役割であり、その参加経験を重ねていくことが、倫理的問題の判断や対応力向上につながる。
3. NICU看護師が実際に抱えるジレンマを把握することは、倫理的問題の対応に向けて重要な過程である。
4. NICUという特殊な環境で生じ得る倫理的問題と、そこでケア提供する看護師の倫理的問題の認識の実態を把握することは、実情に応じた対応を見出すために重要である。
5. 倫理的問題について話し合うこと、また、倫理的問題の背景にある様々な考え方や価値観を俯瞰し、児にとっての最善の利益を常に意識し、対応することが重要である。

本研究では、NICU看護師の倫理的問題への対応に関する知見を得ることができた。今後は、明らかにした対応を実践し、検証していくことが課題と考える。

引用文献

- 船戸正久, 玉井普, 和田浩, 島田誠一(2004) : 新生児の倫理問題と意思決定後の対応 - NICU看護責任者に対する全国アンケート調査 -, 日本周産期・新生児医学会雑誌, 40(4), 817-822.
- 井上みゆき, 横尾京子(2009) : NICUにおける子どもの最善の利益と生命維持治療に対する看護師の認識, 日本新生児看護学会, 15(2), 11-17.
- 井上みゆき(2015) : NICUの倫理的意思決定に効果的な看護師 - 医師コラボレーションの要因 - Magnet Hospitalに勤務するARNPの語りから -, 日本小児看護学会誌, 24(1), 61-67.
- 加部一彦(2017) : 新生児医療の倫理的課題, 医学のあゆみ, 260(3), 237-240.
- 北尾麻梨, 津田聡子, 山口智子, 他(2018) : NICUにおける医学上の倫理的意思決定の実態と看護師の参加に関する要因 - 看護師の役割の一考察 -, 日本小児看護学会誌, 27, 83-90.
- 宮坂道夫, 石原逸子, 吉田みつ子, 他(2014) : 系統看護学講座 別巻 看護倫理, 医学書院, 96-97.
- 水澤直子, 遠藤玲子, 井上みゆき(2005) : NICU看護師が語るジレンマ, 小児看護, 36, 152-154.
- 中山宏美, 永井順子, 福原里恵(2008) : 当施設の新生児医療をめぐる話し合いの現状と課題 - 18トリソミー児一事例のカンファレンスを振り返って -, 広島県立病院医誌, 40(1), 171-175.
- 佐久間純子, 安中みい子(2016) : 気管内挿管管理児の抑制に対するNICU看護師の思い, 日本看護学会論文集 急性期看護, 46, 192-195.
- 櫻井浩子(2011) : 重症新生児の治療方針 - 親の意思決定責任を中心に -, 生命倫理, 21(1), 85-93.
- Sara T. Fry and Megan-Jane Johnstone 著, 片田範子, 山本あい子 訳(2010) : Ethics in Nursing Practice THIRD EDITION A Guide to Ethical Decision Making, 日本看護協会出版会, 272.
- 山口美穂子, 木下大介, 秋田大輔, 他(2020) : 経口気管挿管下で退院し自宅で看取りを行った重症低酸素性虚血性脳症の1例, 日本周産期・新生児医学会雑誌, 56(3), 468-473.
- 横尾京子(1996) : 新生児の治療をめぐる意思決定に関する倫理的問題と看護婦の価値観, 臨床看護研究の進歩, 8, 91-97.
- 横尾京子(1997) : ハイリスク新生児の看護とQOL 第2回 NICUにおける倫理的課題 - 意思決定への親の参加 -, 10(4), 79-82.